

# 「和久里融通大念佛狂言」攷

——「餓鬼角力」の地藏菩薩と閻魔大王——

村上 美登志

## I、始めに

先稿<sup>〔1〕</sup>では、福井県小浜市和久里で六年毎に開催される「和久里融通大念佛狂言」の演目の一つである、「餓鬼角力」等について考察したが、この「餓鬼角力」に登場する地藏菩薩（地藏薩埵・妙幢菩薩）と閻魔大王（閻羅王）が日本では、とくに中世以降、同一のものと信じられ実質的には、一人二役（地藏菩薩は閻魔大王の化現・閻魔大王の本地佛は地藏菩薩）であるということ、それがどのように受容され、或いは変容されてきたのかということ等については、紙幅の都合から言及しえなかつた。そこで本稿ではこのことについて、いささかの卑見を申し述べておきたいと思う。

## II、地藏菩薩と閻魔大王

我が国では死者を看取ることも、死を身近に感じることも、ほとんど少なくなつたと言われて久しい。だが、死が身近なものでなくなつた昨今、一見すると死後の世界、すなわち、「他界」という異空間は、科学的な現代においてそれほど信じられていないようである、その実、他界の情報は巷に溢れかえり、それはことさら珍しいものではなくなつてきている。そして、こうした死後の世界に必要以上に捉われてしまう人も少なくないという現象も一方では起きている。また、死後の世界を尊崇する行事、儀式も数多い。たとえば、未だに脈々と続く地藏盆などの地藏信仰や、そうした日本の歴史的風土等から見ても、地藏菩薩と閻魔大王を含めた死後の世界もその一つであるように思われる。

まず、地藏菩薩であるが、これは観音菩薩と共に庶衆の人気を二分するものである。しかし、その像数においては、観音菩薩と

は違って、伽藍に安置されることがほとんどない、謂わば野辺の地藏様なので、その数はとうてい比較にならない。また、秘佛扱いされることも少なく、まさに庶衆の「お地藏様」として、その莫大な造像数と共に極めて身近な存在である。

こうした地藏菩薩は、サンスクリット語で「クシテイ・ガルバハ」といい、『地藏菩薩発心因縁十王経』等に拠ると、閻魔王の化身とされている。釈迦が入滅してから五十六億七千万年後に弥勒菩薩（中国では布袋がこれに相当する）が現われるまでの間、我々衆生を救ってくれる有り難い菩薩ということになっているが、インドとは縁のない菩薩だという説もある。こうした地藏の名が日本で最初に顕われるのは天平勝宝七年（七五五）の『東大寺要録』に見える虚空蔵と地藏が対で作られたという記事である。たしかに、覚鑿の『地藏講式』等にも明らかのように、平安時代初期までは、虚空蔵を天、地藏を地の佛として法会がなされ、虚空蔵と地藏は一对のものと考えられていたが、地藏菩薩<sup>3</sup>は、前の観音菩薩との比較でも触れたように、虚空蔵とも違って、堂内に安置されることよりも寺院境内や、各村の入り口、畦道、峠、追分、四辻、墓地内外などの野外の路傍に置かれることが多く、庶民的で親しみ易い佛といえよう。それは、「延命地藏」「身代わり地藏」「水子地藏」「安産地藏」「子安地藏」「子育て地藏」「裸地藏」「縛り地藏」「いほ取り地藏」「とげ抜き地藏」「田植え地藏」「勝軍（矢取り・矢拾い）地藏」「笠地藏」等といった様々な名のもとに信仰されていることから明らかであろう。ま

た、近年（平成十五年）でも、元気に長生きして（ピンピン）、楽に大往生（コロリ）することを願い、「ひんころ地藏」（長野県佐久市野沢）なるものが作られ、町興しや商店街復興の一環として喧伝され、新たな信仰を集めていることもよく知られており、これからも同種のもは増えていくと思われる。

地藏菩薩は、網代笠を被らず頭を刈り上げ、僧衣は通肩にしており、所謂声聞形或いは比丘形で、托鉢の僧侶や雲水に似ているが、如意宝珠を持っているところなどが異なっている。シンボリックな物としては、この如意宝珠の他に錫杖を持っている。こうした、地藏菩薩に関することや信仰的なものは、奈良時代にはすでに『地藏十輪経』・『地藏本願経』・『占察善恶業报経』などの所謂地藏三経等によって伝来していたが（日本最古の説話集である『日本霊異記』も地藏と閻魔を同体のものとしている）、広くは一般に普及せず、末法の平安時代末期に入つてようやく源信らの佛教が功を奏して拡がりを見せるようになる。鎌倉時代初期には、『佛説預修十王生七経』を始め、『地藏菩薩発心因縁十王経』・『地藏菩薩十齋日』・『坐圀大道心駈策法』等の諸偽経が生み出され、ここから、盛んに閻魔の本地が地藏菩薩だといわれるようになり、やがて閻魔と地藏菩薩が同一のものとして、地獄と浄土を往復出来るものとも考えられるようになった。ただ、一説によると、地藏菩薩は自ら望んで奈落（地獄）に落ちたので、観音菩薩よりもその地位は低いとされている。

地藏菩薩像の面白いものとしては、奈良教育大学の比較的近く

にある「新薬師寺」には、裸形の地藏菩薩がある。このお地藏さんには男性性器があり、俗に「おたま地藏」と呼ばれて信仰されている。また、近くの「伝香寺」にも裸形の地藏菩薩があつて、それは、佛の三十二相の「陰蔵相（馬陰蔵相）」が表わされている珍しいものである。さらには、高野山の「化粧地藏」・「仲好し地藏」等も、やや特異な地藏の範疇に入るものであろう。

次に、閻魔大王について見てみよう。閻魔とは、サンスクリット語やパリー語の「ヤマ」の音訳されたものである。ヤマラージュの音訳は閻魔羅闍（羅闍は王の意）であり、意訳は閻魔大王とされ、閻魔王ともいわれる（インドではなく中国が閻魔の発祥地だという説もある）。

閻魔像の変つたものとしては、住吉大社（大阪市住吉区）の北約四百米の住宅地のお堂（住吉区東粉浜三丁目）に、閻魔の顔をした異形の「閻魔地藏」が祀られている。天文七年（一五三八）に造られたこの閻魔地藏は、いまだに地域の厚い信仰を集めている。閻魔は、死者の世界を掌り、地藏は死者を救済に導くとされるからである。この地藏菩薩の化身とされる閻魔の像は、笏を持った約一・二米の坐像で、普段は顔のみしか参観できないが、地藏盆（八月二十三・四日）の両日は、その全身が開帳されている。

また、西方寺（大阪市浪速区）にも、浄瑠璃の「摂州合邦辻」の舞台となった合邦辻閻魔堂に閻魔が祀られ、特殊なものとしては、西明寺（栃木県益子町益子）に安置されている、破顔一笑の

「笑う閻魔大王」等も、これを不気味な笑いととるか、親しみ易い笑顔と見るかは、意見の分かれるところではあるものの、夙に著名なものである。

### Ⅲ、日本の地獄観

閻魔のいる地獄とは意識で、梵名は奈落迦、または泥墮耶、略して奈落、泥墮ともいう。それは、地下数米のものをいうのではない。広い瞻部洲の地底にあるとも、大鉄冨山、或いは金剛山の下にあるともいわれるが、そもそもこの地球上には、如何なる辺境の地、過疎の地であつても、また、たとえ地の底、海中の奥底であつたとしても、佛説にいう閻魔のいる地獄（奈落）というものには実際には存在しない。つまり現世において、三宝に帰依し善徳を積んで、ついには浄土に成佛せんがために勧めた、布教のための經典の創作記述に過ぎないからである。インドでは、最古のヴェーダ期から伝えられてきたあの世（冥界）の思想が異民族、異宗教の要素を漸次取り入れながら、地獄のイメージを形作ってきたが、佛教が興つてからは、因果応報の教義によつて、佛教の説として再構成されていった。一方、中国では文字を尊ぶ文化から、經典を漢訳する過程で時代、地域性に関係なく同等のものとして、夥しい經典の訳出が行なわれた。したがつて、所詮、中国での地獄説や地獄観は、インド伝来の所説を大きく外れるものではないと思われるが、日本では、現世において罪業の

ある者が死後に地獄に堕ちて苦悩を受けるとされ、その地獄の主  
宰が閻魔で、牛頭・馬頭等の獄卒が地獄に堕ちた死者を責め苛む  
といわれる。八熱地獄・八寒地獄という大きな地獄の他に、「別  
処」といわれる小地獄を加えると、その数は百三十六にも及ぶ。  
このように、佛教にも夙くから地獄の思想が齎され、鎌倉時代の  
初期には、地獄の名の下に因果応報の思想として定着していった  
ようである。

#### IV、「餓鬼角力」の内実

次に、「餓鬼角力」の内実を簡単に概観しておこう。

福井県小浜市和久里の西方寺で奉納される、「和久里融通大念  
佛狂言」の演目内容については、左記の通りである（奉納年によ  
っては、時間等の変更もある）。

初日（午前）「餓鬼角力」「花盗人」「炮烙割り」

（午後）「とろろ滑り」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

（宝塔縁起奉読）「狐釣り」「腰祈り」「寺大黒」

中日（午前）（宝篋印塔供養）（大般若経奉読）（宝塔縁起奉

読）

（午後）「とろろ滑り」「狐釣り」「腰祈り」「炮烙割り」

（宝塔縁起奉読）「寺大黒」「餓鬼角力」「花盗人」

「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

楽日（午前）「寺大黒」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」  
（午後）「狐釣り」「花盗人」「腰祈り」（宝塔縁起奉読）  
「炮烙割り」「とろろ滑り」「餓鬼角力」

この番組内容からも理解されるように、初日の冒頭と楽日の最  
後の演目が「餓鬼角力」であるのは、「和久里融通大念佛狂言」  
の本質が、「施餓鬼会」を明確に意図したものであることが分か  
る。<sup>5)</sup>

さらに、「宝篋印塔供養」を含め、「宝塔縁起奉読」が三日間で  
五回も奉納されている。これは、この地方の代官であった長井雅  
楽<sup>たのすけ</sup>介が、出家を果たし、朝阿弥<sup>あさあみ</sup>（沙弥朝阿）と号して、延文三  
年（一三五八）に建立した宝篋印塔（通称市の塔）の信仰に関わ  
るものであることも理解される。

すなわち、この和久里の「融通大念佛狂言」を大きく捉える  
と、本質的には「施餓鬼会」の開催を旨したものであるが、そ  
の中に古くから地元の信仰を集めていた「市の塔」の供養を絡め  
ていることにも気付かされる。それは、上述したように、初日・  
中日・楽日の午後、市の塔に対する「宝塔縁起奉読」が計三回  
組み込まれ、さらに、中日午前には、「宝篋印塔供養」と「宝塔  
縁起奉読」が行われ、三日間で五度に亘って、市の塔の供養が成  
されていることから肯けるのである。

先ず、「餓鬼角力」の内実を見ておきたい。登場人物、内容は  
以下の通りである。

〔登場者〕地蔵菩薩、亡者（餓鬼）二人、閻魔大王、鬼（赤・黒）二匹。

豪勢な冠に派手な出で立ちの閻魔大王が、鬼二匹（ここでいう二匹の鬼は、地獄の獄卒である馬頭羅刹と牛頭獄卒のことであろう。明治四年（一八七一）に今の警察の巡査に相当する「羅刹」が設けられたが、これは巡羅する兵卒から来ているもので、羅刹・獄卒と同じように、こうした呼び名を連想させる羅刹が、いかに当時の庶民に恐れられた存在であったかがよく分かる）を引き連れて、足を踏み鳴らしながら地獄に見立てた舞台へと登場してくる。一方、地獄の亡者たちは、閻魔大王の強烈な威風に圧倒されて地蔵菩薩の脇に隠れ、恐怖に慄きながら小さくなって入場して来る。

角力は、勝負以前のもので、閻魔大王の子分である鬼たちが四股を踏むだけで亡者はひっくり返ってしまう。そこで、壬生寺の本尊である地蔵菩薩が佛に祈りを捧げると、亡者たちに力が漲り、鬼たちを次々に投げ飛ばしてゆく。ふがいない鬼どもに怒った閻魔大王は、地蔵菩薩に勝負を挑むが、佛の力には敵わず、打ち負かされてしまう。喜んだ亡者たちは地蔵菩薩と共に意気揚々と引き上げて行く。

舞台上に残された閻魔大王は、鬼たちに怒りをぶつけながら退場していくという筋である。

この曲目が、「和久里融通大念佛狂言」の最初と最後に置かれているのは、先にも述べたように「施餓鬼会」の意味に、市の塔

の供養を絡め、さらには本寺壬生寺の本尊である地蔵菩薩の靈験を説くためにも必要であったと思われる。すなわちこれは、始原の形を残しているのだと考えられる。壬生寺では、冒頭に「炮烙割り」が置かれ、末尾には「湯立て」「棒振り」などの神事儀礼的な演目が当てられており、壬生寺での現存曲目は宗教色をやや離れ、滑稽な仕草を交えた大衆娯楽芸能の側面が強く、和久里西方寺との相違は一目瞭然であるといえよう。

したがってそれは、「和久里融通大念佛狂言」の方が、本寺よりも古態を留めているということの証しでもある。

## V、物語史（資料）中の地蔵と閻魔

昭和の初めから平成の初めに及ぶおよそ七十年間に著された、ほぼ全ての「地蔵信仰」に関する論文を俯瞰的に捉え考究した、清水邦彦氏の「日本地蔵信仰史研究概観」<sup>⑥</sup>には、我が国の地蔵信仰について、「日本に於いて地蔵信仰がどのように受容され、展開するようになったか、先行研究では明確ではない」と結論付けられている。宗教史や佛教学などからのアプローチが主であるため、こうした民間信仰を捉え切るには限界があったようである。しかし、これを文学の視点から捉えてみると、地蔵信仰・閻魔信仰の新たな一面に触れることが出来るものと考えられるため、物語文学を史（資）料として、その中に地蔵信仰・閻魔信仰に関わる民間信仰の受容・変容等の一端をそこに探ってみようと思う。

閻魔大王とは、地獄を総括する長である。すなわちこの世の罪人を裁く、恐ろしい大王であるが、何故か蘇生に関わっている。その早い例としては、橘成季が建長六年（一二五四）に著わした『古今著聞集』<sup>7</sup>に見える、慈心房尊恵の地獄巡りである。それは、撰津国の清澄寺（現在の宝塚市）にいた、元比叡山学徒・慈心房尊恵の事である。尊恵は、承安二年（一一七二）七月十六日に閻魔王宮から立文を貰う。それは、閻魔庁において十万人の法華經持経者による法華經転読の集会があるので、それに参加せよという招待状であった。尊恵は招待状を受け取った後、十八日の申の終わり（午後五時）頃に横になると、酉の時（午後六時頃）ばかりに息絶えた。そして次の日の辰の終わり（午前九時頃）ほどに生き返って、冥途での出来事を語ったという。

この話は、延慶年間（一一三〇九年頃）に書写された、『平家物語』現存本中、最古態である『延慶本平家物語』<sup>8</sup>巻第三本第十四の「太政入道、慈恵僧正の再誕の事」に詳しいので、その本文を引いてみる。

抑、入道最期の病の有様はうたてくして、悪人こそ思へども、実には慈恵大師の御身なりと云へり。何にして慈恵大師の御身と知らむと云へば、撰津国清澄寺と云ふ所あり。村の人は清澄寺とも申すなり。彼の寺の住侶、慈心房尊恵と申しけるは、本、叡山の学徒、多年法花の持者なりけるが、道心を発し、住山を厭ひて、此の処に住して年を送りければ、人

皆これを帰依しけり。而るに承安二年壬辰十二月二十二日丙辰の夜、脇息に寄り掛かりて、例の如くに法花經を読み奉りけるほどに、丑の剋（午前二時頃）許りに、夢ともなく覺ともなくて、年十四許りなる男の、淨衣に立烏帽子にて、藁沓脛巾したるが、立文を持って来たれり。尊恵、「あれは何くよりの人ぞ」と問ひければ、「琰魔王宮よりの御使ひ也。書状候ふ」とて、其の立文を尊恵に渡す。彼の状に云はく、

嘸請閻浮提大日本国撰津国清澄寺の尊恵慈心房

右、来たる廿六日の早旦、琰魔羅城大極殿に於いて、十万人の持経者を以て、十万部の法花經を転読せらるべし。宜しく參勤せらるべし者、国王の宣に依つて、嘸請件の如し。

承安二年壬辰十二月廿日丙辰丑時

琰魔庁

と書かれたりけり。尊恵、否び申すべき事ならねば、領狀の請文を書きて奉ると見て、覺めにけり。偏に死去の思ひを成して、院主光陽房に語る。人皆不思議と思へり。尊恵、口に弥陀の名号を唱へ、心に引接の悲願を念ず。漸く廿五日の夜陰に及びて、常住の佛前に至り、念佛読経す。既に卯の刻に至りて、眠り切なる故に、返りて住坊に打ち臥す。ここに淨衣の装束の男二人出で来たりて、早く參せらるべきよし勧むる間、王宣を辞せむとすれば、甚だ其の恐れあり。參詣を企てむとすれば、更に衣鉢なし。此の思ひを成す時、二人の童

子、二人の下僧、七宝の大車、自づから坊の前に現す。法衣自然に身を纏ひ、肩に掛かる。尊恵、大きに悦びて、即時に車に乗る。衆僧等西北の方に向かひて空を飛びて、琰魔羅城に至る。王宮を見るに、家中眇々として、其の内広々たり。

見てのように尊恵は、閻魔大王から法華經転読パーティーの招待状を貰うのだが、まず、招待を断れば只では済まないことは明白である。また、生きて地獄に行けるのか、死ななければ行くことが出来ないのかも分からない。そして、再びこの世に戻って来れるのかも分からない。地獄に行くにも、どうして行くのかも分からない。着ていく服もない。そのような思案に暮れている時に、道案内人として二人の童子と二人の僧が忽然と現われ、氣付くと正装の法衣をすでに身に纏っており、まさにシンデレラの話のごときカボチャの馬車ならぬ七宝の大車も尊恵の前に現われ、喜んだ尊恵は大車に飛び乗り、西北の方に向かって空を飛び、やがて地獄に到着し、法華經の転読を無事に終える。

その後、地獄の建物を物珍しく參觀している時に、閻魔大王に呼び止められる。

「余の僧は、皆悉く返り去りぬ。御房来たる事何等ぞや」。尊恵は閻魔大王の問いに、「後生の在所を承らむが為也」と答える。それに対して閻魔大王は、「撰津国に往生の地五処あり。清澄寺は其の一也。即ちは諸佛経行の地、釈迦・弥勒の現処也。往生不往生は、人の信不信に有り」と言い、太政入道浄海（清盛）は、

「只人に非ず。慈恵僧正の化身、天台の佛法護持の為に日本に再誕せる人也。必ず此の文を以て彼の人に知らすべし」とも言う。その文とは、「敬礼慈恵大僧正 天台佛法擁護者 示現最勝將軍身 悪業衆生同利益」であり、さらに、『延慶本平家物語』には、清盛は白河院の御子であり、白河院も高野山を再興した祈親持経上人の生まれ変わりとして記されている。尊恵は、「七日と云ひける正月二日丙寅の戌時に蘇へ」り、このことを伝えたために、清盛が慈恵僧正の生まれ変わりであることが人の知るところになったという。

ここで確認しておきたいのは、人を裁き、地獄に墮とす閻魔大王が、地藏菩薩宜しく尊恵を蘇生させていることであり、さらには往生極楽をも勧めていることである。

しかし、何故、閻羅庁で法華經の転読が行なわれたのか、そこに何故、尊恵が招待されたのかは不明である。

次に、平安時代末期成立の『今昔物語集』にも興味深い話がある。たとえば、巻第十七「陸奥国女人依地藏助得活語第二十九」には、得一菩薩の建てた寺に平将行の三女という尼がいた。この女人は、出家以前から、「形子美麗ニシテ心柔和ケリ。父母有りテ度々夫ヲ合セムトスト云ヘドモ、全ク此レヲ好マズシテ、寡ニシテ年ヲ送」っていたが、やがて、「而ル間、此ノ女身ニ病ヲ受テ、日来悩ミ煩テ遂ニ死ヌ。冥途ニ行テ、閻魔庁ニ至ル」ことになる。地獄の庭は、罪人の歎き悲しむ声が雷のように響いていた。耐えられぬほどの凄まじさであったが、そこに一人

の小僧がいることに気付いた。その「形端厳也。左ノ手ニ錫杖ヲ取り、右ノ手ニ二卷ノ書ヲ持テ、東西ニ往反シテ、罪人ノ事ヲ定ム。其ノ庭ノ人皆此ノ小僧ヲ見テ、地藏菩薩来リ給ヘリト云」つたという。見てのように、地藏菩薩が罪人の罪の軽重やその有無を判定しているのである。地藏菩薩に出会った女は、兩三度「南無婦命頂礼地藏菩薩」と唱える。それに呼応した地藏菩薩は、「汝デ、我レヲバ知リヤ否ヤ。我レハ此レ三途ノ苦難ヲ救フ地藏菩薩也」と告げる。そして、この女に「男淫ノ業無ガ故」に命を助けようという。閻魔庁に向かつてこの助命の理由を述べると、閻魔大王も「只仰セノ旨ニ随フベシ」と承諾する。閻魔庁の門の外に出てから、地藏菩薩はこの女に「一行ノ文(偈)」を授ける。それは、「人身難授 佛教難値 一心精進 不惜身命」の偈であり、また、往生極楽のために、「極楽ノ道ノシルベハ我身ナル心ヒトツガナホキナリケリ」という要句も教える。その後、出家を果たした女は僧名を「如藏」と称し、世の人はこの尼僧を「地藏尼君」と尊称した。八十二歳を超えての大往生を果たしたともいう。『延慶本平家物語』に見た、閻魔大王にせよ、この『今昔物語集』の地藏菩薩にせよ、尊恵や女に往生極楽を勧め、また、その方法を教え、さらには偈を与えたり、後生の在所まで教えた後、最後には蘇生させている。

## VI、結びに代えて

地獄に示現するのは、地藏菩薩だけではないことを、中国で十世紀頃には成立していた『太平公記』<sup>⑩</sup>に求めると、そこではすでに釈尊も観音も降臨している。それは、趙泰という男が地獄を遍歴している時に、世尊、観音大士等の佛菩薩が地獄に示現しているのを見ているからである。これはどう考えればよいのであるか。

おそらく、元來は釈尊も観音も地獄に赴き、説法により人々を度脱すると信じられていたようであるが、地藏信仰の広まりにつれて信仰が庶民化していく中で、地藏のみが地獄の菩薩として、庶民の希求する現世利益に適用ために都合よく変容されていったのだと考えられる。

次に、『延慶本平家物語』によると、閻魔大王は、慈心房尊恵に、「悪業衆生同利益」(悪業を犯した衆生にも同じように利益を与える)の偈を託し、清盛に伝えよといったが、さらに、「善悪は一具の法」(善と悪は同列で等しいもの)であるといい、白河院は祈親持経上人の生まれ変わりとして善を成し、「善根の徳を兼ね」「功德の林を成した」が、白河院の御子でありながら悪業を重ねた清盛もまた、慈恵大師の生まれ変わりとして、「功德も悪業も共に功を重ねて、世の為、人の為、利益を成し」たとする。しかもこれは、「釈尊と調達(提婆達多)と同じき種姓に生



まれて善悪の二流を施」したということと同じだとするのである。『平家物語』は、「怨親平等」（怨敵も自分を愛してくれる人も平等に扱わなければならない）の物語ともいわれるが、地藏菩薩と閻魔大王の善悪一具もこれに当て嵌まる。

また、視点を変えれば、閻魔大王が、蘇生に関わることは、たとえ祟り神である厄神であっても、祟る力があるのであれば、救うことも出来る筈だという、日本独自の精神風土に根付いたものだともいえる。たとえば、国家神道である金光教や大本教等が、厄神の天地金乃神、良金神等を信仰の対象として祀っていることなどから考えてみると、誰もが恐れ、出来ることなら関わりを持ちたくない筈の閻魔大王を、庶民の味方である地藏菩薩の化現として崇めていることや、笑う閻魔大王像があること等にも納得がいくのである。

すなわち、狂言の「餓鬼角力」に登場する鬼より恐い閻魔大王と庶民のヒーローである地藏菩薩は、佛教の説く本地垂迹として同一のものであり、ある意味、したたかな庶業にとっては、謂わば「外連味」たっぷりのごうした「狂言角力」の勝負に勝つても負けても、救って貰えることを二重に期待していたということになるのではあるまいか。それは被告人を裁き、死刑判決を言い渡す、最高裁の裁判長が閻魔大王だとすると、被告人を護り、無罪判決を勝ち取るうとする辣腕弁護士が地藏菩薩であるということである。しかもこの両名が同じものであるとすれば、無罪を勝ち取ることが自ずと期待されるということである。

それは、物語文学を史（資）料として縷々述べてきたように、閻魔大王が人を裁き、地獄の底に突き墮とすだけではなく、蘇生させ、往生極楽に導くことも出来るのだが、地藏菩薩もまた、閻魔大王の裁きを覆すという大きな力を持ち、罪業人を蘇生させ、往生極楽させる能力を持っていると信じられていることから無理解することができ、決して不思議なことではないのである。何の力も持たない庶民にとっては、この世の幸せを希求するだけでなく、あの世に至っても苦しみからは、必ずや救済されなければならないのである。この世に真の民主主義、公平・平等といったものが存在しえないのであれば、ことさらにこうした地獄に関わる庶衆の思いには、願い切なるものが、そこに見えてくるのである。

時に、この「狂言角力」の笑いは神佛の力を増す。それは古来より、「角力（相撲）」自体が、邪悪な魔を祓う厄除けの呪術の一つであり、神々への捧げ物となるからである。

#### 註

- (1) 村上美登志「和久里融通大念佛狂言」の世界―祈りの形象かたち―、「立命館文学」第六一八号、平成二十二年十月、
- ―「壬生狂言」追跡―和久里融通大念佛の場合―（『軍記物語の窓』第三集、和泉書院、平成十九年十二月）等参照。
- (2) 覚饒『地藏講式』『密厳諸秘釈二の内』。
- (3) 『目連三世宝巻』『宣統元年春壬月、蘇城・瑪瑙経房蔵板』

に拠ると、地藏菩薩の名が「目連」と記されている。

- (4) 澤田瑞穂『修訂地獄変——中国の冥界説』(河出出版、平成三年七月) 参照。

- (5) 註(1)に同じ。

- (6) 『比較民俗研究』第十三号(平成八年三月)。

- (7) 京都市大学附属図書館蔵本、近衛本『古今著聞集』巻第二「釈教第二」「尊恵慈心房」の条。

- (8) 村上美登志『中世軍記文学選』第四版(和泉書院、平成十一年十月) 参照。

- (9) 新日本古典文学体系三十六『今昔物語集』(岩波書店、平成六年十一月)。

- (10) 『太平公記』巻第一〇九「趙泰」の条。

- (11) 紙谷威広「福神と厄神」(『講座・日本の民俗宗教第三巻・神観念と民俗』、弘文堂、昭和五十五年) には、福神と厄神の關係は、単に二元的に対立するものではなく、福神が厄神を内包し、厄神もまた、福神を内包するというように触れている。したがって、地藏菩薩と閻魔大王の關係も、まさにこれに相当する。

- (12) 喜多村理子「盆に迎える霊についての再検討——先祖を祀る場所を通して——」(『日本民俗学』第百五十七・百五十八合併号、昭和六十年一月) に拠ると、正月様と厄神、盆棚と餓鬼棚祭祀などの並祀に見られる祀られ方には、明確な区別があるという。すなわち、福神は座敷などの所謂上座

であるのに対して、厄神は縁側や屋外などの下座に祀られていることを指摘している。こうした区別は、団体であると言いつながら、地藏菩薩が閻魔大王を超える能力を持っていることに繋がるものだと考えられる。

#### 附記

本稿は、平成二十一年度から二十五年度にかけて五年間に亘り採択された、「科学研究費補助金(基盤研究C)」に拠る研究成果の一部であることを申し添えておく。

(むらかみ・みとし) 国立舞鶴高専人文科学科教授